

西条小学校における家庭科学習指導の研究

—戦後から昭和30年代にかけての教育実践を中心に—

渡 辺 一 弘

A Study of Home Economics Learning Instruction in Saijo Elementary School:
Mainly on Educational Practice from the End of World War II
to the 30s of the Showa Era

Kazuhiro WATANABE

【要 旨】

本研究は、戦前から独創教育で著名な広島県の西条小学校における、戦後から昭和30年代にかけての家庭科学習指導を、学校所蔵資料を主な分析資料として、学校関係者への聞き取りも行い、検討したものである。分析の結果、主に以下の二点が指摘できる。

第一に、戦後初期から昭和20年代末までの西条小学校における家庭科学習指導の特徴は、社会科を中心とした同校の独創的な指導と比べると、貧弱なものであったが、徐々に重視される教科として、特に技能指導に力を入れられるようになった。

第二に、昭和30年代における家庭科学習指導の内容は、家庭科の独自性と学習内容の構造化をより明確化し、具体的な指導がなされるようになった。

【キーワード】

西条教育 家庭科学習指導 教育実践 戦後

1. 問題の所在

本稿は、戦前から独創教育で著名な広島県の西条小学校における、戦後から昭和30年代にかけての家庭科学習指導を、学校所蔵資料を主な分析資料として、学校関係者への聞き取りも行い、検討することを目的とする。

西条小学校は、1923（大正12）年に校長として赴任した檜高憲三（ひだか・けんそう）の指導によって実践された「西条教育」という名の

独創教育で著名な小学校である。檜高は、大正自由教育の時代に、創造教育についての直接的な理論を提示した千葉命吉（ちば・めいきち）の教育理念を基に独創教育を実践した。戦後、1946（昭和21）年に校長となった池田弘（いけだ・ひろむ）も、檜高の「西条教育」の伝統を継承しつつ、社会科を中心に新たな独創教育を展開した。

戦後は、平田が¹⁾一連の研究¹⁾でも指摘しているとおり、かなり早い時期から社会科実践が行われており、社会科の先駆的実験研究として西

条小学校の西条プランが成立していた。これらの伝統を継承し、その後も西条小学校は独創的な教育実践を行い、現在でも、新たな独創教育の実践—例えばオペラ「白壁の街」の上演²⁾など—を行っている。

一般に「西条教育」、もしくは西条小学校の教育実践に関する興味・関心は、社会科に限られるようであり、研究対象の教科も先の平田をはじめとして、社会科に集中しているように思われる³⁾。

しかし、戦後、社会科と同様に小学校において、これまでは女子のみを対象として行われてきた「家事科」「裁縫科」も、内容を異にした男女共修の「家庭科」が誕生した事実を踏まえるならば、大正新教育の伝統をもち、戦後も新たな独創教育を展開した西条小学校の家庭科学習指導を検討することは、戦後初期の家庭科教育の実践と、その後の展開を検討するうえで意義があると考えられる。また、戦後初期からの家庭科教育の実践研究自体も少ない⁴⁾。

そこで本稿では、戦後から昭和30年代にかけての西条小学校を対象として、学校所蔵の当時の家庭科学習指導関係資料を主な検討資料として用い、学校関係者への聞き取りも加えて、戦後の社会科を中心とする地域教育計画で著名であった小学校の、家庭科学習指導の教育実践の様子を概観しようと試みるものである。

2. 事例研究の対象と検討資料・方法

(1) 対象—西条小学校の概要

西条小学校の簡単な沿革は以下のとおりである。

〈沿革〉

明治5年	私塾修身館創立
明治10年4月	四日市小学校
明治19年4月	上西条小学校
明治24年4月	西条町立西条尋常小学校
昭和16年4月	西条国民学校
昭和22年4月	西条町立西条小学校
昭和34年10月	西条町立西条小学校

(※4校統合)

昭和49年4月 東広島市立西条小学校
平成11年10月 創立40周年記念事業開催

(※統合後)

平成21年7月 創立50周年記念式典・記念碑除幕式開催

西条小学校は、明治5年に創立された私塾修身館がその源流であり、その後、数度の校名変更を経て、明治24年4月、西条尋常小学校となった⁵⁾。先述のとおり、大正末には「西条教育」という名の独創教育の実践を行い、戦後もその伝統を継承した。昭和34年10月から翌35年4月にかけて、旧西条・御園宇・下見・吉土実の4小学校が統合して新たな西条小学校が生まれた。なお創立当時は、西条教場、御園宇教場、下見教場、吉土実教場と呼ばれていたが、4つの教場が現在の新校舎に合併した昭和37年4月に名実共に完全な統合をみた。そして翌5月に県の教育委員会より教育実験学校の指定を受け、昭和38年11月に第2回西条小学校教育研究会(※第1回は昭和36年6月開催)、昭和39年11月に第3回広島県教育実験学校・西条小学校教育研究会が開催された⁶⁾。

ちなみに、統合前の旧西条小学校を中心に、戦前の昭和3年から昭和30年までの27年間、計28回にわたって、継続して毎年、全国規模の「西条教育研究大会」が開催されており、特に戦後の昭和20年から30年にかけての西条の地域教育カリキュラムの実践は、当時、全国の教師から注目されており⁷⁾、参加者も多かったようである。

なお、西条小学校がある広島県東広島市(人口約19万人)は、県の中南部に位置する盆地の地域であり、県内の各方面へ流れる川の源流となっており、元々は灘、伏見、と並ぶ「酒都」であった。1980年代から始まった広島大学の移転に伴い、現在は学園都市として発展し、広島市に隣接していることから、ベッドタウンとしても発展している。

(2) 検討資料

検討資料として用いるのは、学校所蔵資料の以下の11点である。

- ・西条小学校 1948,『新教育研究第二集実験学校西条教育の実際』(資料1)
- ・西条小学校 1949,『新教育研究第三集実験学校西条教育計画の実際』(資料2)
- ・西条小学校 1950,『新教育研究第四集実験学校西条教育の実際』(資料3)
- ・西条小学校 1951,『新教育研究第五集実験学校西条教育の実際』(資料4)
- ・西条小学校 1953,『新教育研究第七集実験学校西条教育の実際』(資料5)
- ・西条小学校 1954,『新教育研究第八集実験学校西条教育の実際』(資料6)
- ・西条小学校 1955,『新教育研究第九集実験学校西条教育の実際』(資料7)
- ・西条町七小学校 1958,『西条町教育の実際』(資料8)
- ・西条町七小学校 1959,『西条町教育の実際』(資料9)
- ・西条小学校 1963,『第2回西条小学校教育研究会要項』(資料10)
- ・西条小学校 1964,『第3回広島県教育実験学校西条小学校教育研究会要項』(資料11)

(3) 方法

平成17年1月から3月にかけて3回にわたり、西条小学校への訪問調査を実施し、学校所蔵資料の閲覧・コピーを行い、具体的には主に、以下の二点を検討する。

- ①戦後初期から昭和20年代末までの西条小学校における家庭科学学習指導の内容を検討し、その特徴や傾向を明らかにする。
- ②昭和30年代に入り、地域の7つの小学校⁸⁾と共同で研究会を開き、その後これらの小学校の内の3校と統合し、広島県教育委員会から教育実験学校の指定を受けて学習改善指導の研究を始めてから、西条小学校に

おける家庭科学学習指導の実践がどのように変化したか、その様子を検討する。

これに加えて同校元教諭・教頭・校長の増田秀明氏(昭和22~40、53~56在職)と元教諭・教頭の宮川忠孝氏(昭和16~19、34~42在職)への聞き取りも行った。

3. 結果と考察

(1) 戦後初期から昭和20年代末までの教育実践

先ず戦後初期から昭和20年代末までの家庭科学学習指導の内容について、資料1~6における家庭科学学習の記述について検討する。

資料1(昭和23年)では、目次の所で各教科の指導のあり方の項目が出てくるが、具体的な教科名を出して説明してあるのは、国語・算数・理科・社会の4教科のみで、特に新しい教科である社会科と理科の項目が多い。社会科と同様に新しい教科である家庭科は、総頁271頁中「各科各学年学習記録」の項目で、6年生の指導案の簡単な説明6頁のみである(下線は筆者、以下同様)。家庭科という教科の扱いは、極めて小さいといえるだろう。具体的な内容は以下のとおりである。

【題材】食物のとり方(健康な日常生活)

【目的】楽しい人生、楽しい社会をつくる根源としての健康な身体は、どんな食べ物から得られるか、日常の食物の取り方について科学的に検討し、乏しい食料で如何にして健康を保つか考究させたい。

【準備】各種研究資料(主要食品の分析表、児童の食物調査表)、一日の食物(実物標本)

具体的な授業の流れとしては、以下の4つの部分に分けられる。

- 1) 私たちの食物調査に対する批判
- 2) 日本人の食物と栄養失調の問題
- 3) どんなものをどれだけ食べたら良いか
- 4) 食物をとる上の注意

資料2(昭和24年)では、資料1とは目次構成が異なり、「コアカリキュラム論」「スコープ」「シーケンス」という項目を中心に編集が行われている。当然それらの説明の中心教科は社会科である。家庭科については、総頁158頁中「能力表」「各学年基礎能力指導表」という項目で、5・6年生で身に付けさせたい能力とその指導について、5頁触れてあるのみである。「能力表」で、具体的に上げられている能力は、以下のとおりである。

【能力】「よい身だしなみの能力」「家庭を美しく、住みよくする能力」「家庭に必要な道具を作ったり、手入れする能力」「上手に買う能力」「簡単な食事の支度をする能力」「簡単な被服仕立の技術と保存の能力」「家庭を楽しくする能力」「隣人と気持ちよく交際する能力」

「各学年基礎能力指導表」の項目も、5年生と6年生で、僅かに表現の違いはあるが、先の「能力表」にほぼ一致する。

昭和24年に至っても、相変わらず家庭科の扱いは小さく、その内容についても、特に西条小学校の特徴は見いだせない。

資料3(昭和25年)で初めて、教科別の項目の中に家庭科の学習についての項目が出てくる。ただし、その名称は「家庭学習の葉と指導上の留意点」とある。内容構成は以下のとおりである。

一. 家庭学習の葉

- (一) 細目の決定(何を作るかを定める)
- (二) 実物や標本や絵を見て話し合う
- (三) 型を決める
- (四) 材料には何々があるか調べる
- (五) 製作の計画をたてる
- (六) 製作

二. 家庭指導上の留意点

- ・一般的留意点

- ・学習に当たっては

「二. 家庭指導上の留意点」の最初の記述を、少し長いがすべて引用しよう。

「家庭科指導目標 一、家事経済 二、家庭看護 三、食物 四、被服 五、育児 の五項目の中、特に被服の項を取り上げて述べる。他の項については、中心学習及びその他の学習に依って学ぶはずである。

小学校に於いては、児童自身が日常身に付けて着物を具合よく作ったり、手まめに手入れしたり、上手に着たりする態度を養うことに目標がある。そして、それに必要な技術を身に付けなければならない。

家庭科本来の目的からみると、極一部の仕事かもしれないが、この中にも多くの問題がある。第一に、行き悩むのは設備の点であるが、現在の設備を最高度に生かしつつ、より良い設備の実現に努力する外に道はない。故に本校では本意なくも、ミシンの指導を先に譲り、専ら手縫いによる製作を行っている。結局、よく気がついて直ちに手の下すことの出来る子供を創りたいのである」

昭和25年になると、家庭科の扱いが他の教科と同様になる。また、西条小学校における設備環境上の特徴が見いだせるようになってくる。

資料4(昭和26年)も、資料3と同様に教科別の項目の中に家庭科の学習についての項目が出てくるが、頁数も増え、その名称は「家庭学習の新方向」に変化する。内容構成は以下のとおりである。

- 一. 家庭科の本質
- 二. 改正指導要領の重点
- 三. 小学校に於ける家庭生活指導の目標
- 四. 小学校家庭科の使命
- 五. 家庭生活指導上の一般的注意
- 六. 本校に於ける家庭科の態度
- 七. 本校技術面指導計画案

昭和26年は、学習指導要領の改訂が行われた年なので、資料4にもそれに呼応した記述が見られ、西条小学校の特徴も徐々に表れている。「六. 本校に於ける家庭科の態度」の記述を一部引用しよう。

「(略) 主な修正点は、1. 各学年の全体計画の中に於いて指導する 2. 五・六年に特設する家庭科の時間では、日常家庭生活に必要な初歩の技術を指導するこの様な立場からして、低学年においてはそのすべてが中心学習である。他の教科に対して僭越の感もあるが、人間生活の本質から考えて、以下の図1 (*なお図のタイトルは筆者が付けた) のように解釈する。

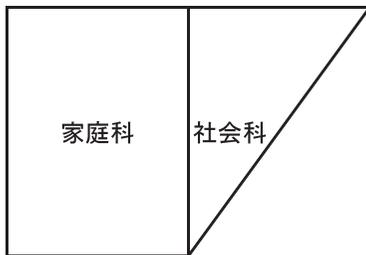


図1 昭和26年、西条小学校の家庭科と社会科の扱い

そこで本校五年・六年の家庭科は、一週二時間をおき、本体は男子と女子を共に指導するが、指導の内容が当然二分されるべき男児の家庭工作、女児の裁縫は、これを分けて二人の教師で指導する。

殊に女児の針仕事に対しては、相当重点をおいて指導している。いわゆる適期指導であると信ずる(中略)ここで間違っではならぬのは、いわゆる教師の天下りの指導で教材をすませるだけでは、児童の多くが応用の利かない子供になってくる。そうではなくて、こまめに針を使う人、必要に応じてどんどん利用していく人、どこでも針の使える人にならなくてはならぬ(後略)」

資料5(昭和28年)では、目次構成が再び変更され、教科別の項目が無くなり、各学年毎の学級経営の項目に、一部教科の項目が含まれる

ようになった。家庭科についての具体的な記述は無くなった。なお参考までに、「六年学級経営の実際」の項目で、取り上げられている教科とその順番が、「社会科の学習」「国語の学習」「算数の学習」「理科の学習」となり、社会科の先駆的実験研究としての同校の特徴が表れている。

資料6(昭和29年)では、目次構成がまた更に変更され、再び資料4の教科別の形式に戻り、「家庭科学習指導の能率化」となった。内容構成は以下のとおりである。

家庭科学習の展望

- 一. 学習の隘路とその打開
- 二. 学習の生活化
- 三. 技術指導の重点
- 四. 今後の家庭科のあり方

「家庭科学習の展望」の冒頭で、家庭科は「小学校教育教科の中で、家庭科ほど存在のほやけた、曖昧な教科はない」との記述があり、また教科に関する研究会において、他の教科に比べて「家庭科の部屋(*部会)が最も出席数が少なく」「女教師ばかりの討議も不活発で、しかも家庭科の専攻は、研究熱の足りない者の研究する教科也。と云った傾向がある」と厳しい指摘もある。

これについては、「一. 学習の隘路とその打開」で、カリキュラムの問題、家庭科に対する意識の変革、男女差の問題(技術面)の3点を指摘している。西条小学校としては、「四. 今後の家庭科のあり方」として、(1)男女同一単元のもとに、(2)家庭科指導には学級担任が当たる、(3)地域的特性にそくして、を挙げている。特に(2)に於いて、「家庭科は女教師がやるものと決められていたようであるが、これは大きな誤りである」と、担任教師が当たる必要性を強調している。

(2) 昭和30年代の教育実践

次に、昭和30年代の家庭科学習指導の内容に

ついて、資料7～11における家庭科学習の記述について検討する。

資料7（昭和30年）では、資料6と同様の教科別の項目形式で、「家庭科学習指導の実際」となった。内容構成は以下のとおりである。

- 一. 技能を通しての家庭科学習のめあて
- 二. 技能面に於ける問題点
- 三. 基礎的技能の実際指導
- 四. 能率的な学習指導

特徴としては、先ず「一. 技能を通しての家庭科学習のめあて」において、家庭科の独自性を社会科と比較して、その内容の混乱－どちらに含まれるか－についての記述がある点である。例えば、「人に対する尊敬の態度」とか「きまりを守る」とかは、社会科相当で指導されているのではという問いである。次に、「三. 基礎的技能の実際指導」に於いて、具体的な事例の説明が、詳細になった点である。

資料8（昭和33年）も、資料7と同様に教科別の形式で、新たに副題のような補足が付き「家庭科学習指導の実際（技能を通しての家庭科学習をどう進めたらいいだろう）」となった。内容構成は以下のとおりである。

- 一. 学習の隘路とその打開
- 二. 六年生家庭科学習の実際
- 三. 五年生家庭科学習の実際
- 四. 反省と今後の研究問題

特徴としては、第一に、章立てで六年生と五年生を分けて説明していること、第二に、具体的な事例の説明がより詳細になったこと、第三に、昭和31年の学習指導要領と昭和36年から実施される小学校の「新しい家庭科」の学習指導要領についての言及があることである。なお先に触れたが、この資料8と次の資料9は、西条小学校単独のものでは無い。

資料9（昭和34年）も資料8と同様の教科別の形式で、副題の補足付きで、「家庭科学習指導の実際（基礎技能を身に付ける指導方法の在り方）」となった。内容構成は以下のとおりである。

- 一. 家庭科の重要性
- 二. 家庭科教育の問題点
- 三. 技能指導の問題点
- 四. 基礎技能の指導内容一覧表（衣）
- 五. 六学年学習指導の実際（ミシンの使い方）
- 六. 五学年学習指導の実際（ぞうきん作り）

家庭科学習指導における基礎技能とその指導についての記述に多くの頁をさいていることが特徴であるといえる。また、ミシンについての実態調査－家にあるか、とか使ったことがあるかとか－についての記述があるのも、高度成長期初期の地方の実態がわかり興味深い。

資料10（昭和38年）と資料11（昭和39年）は、共に公開研究会の資料である。家庭科学習指導に関しては、簡略化した指導案が載せてあるのみである。具体的な題材は、以下のとおりである。

資料10（昭和38年）

学年：6年生

題材：衣生活くふう

区分：第1次（4時間）衣服の計画

第2次（2時間）着方のくふう

・・・（本時は2時間目）

第3次（6時間）洋服カバー作り

学年：5年生

題材：応接と訪問

区分：第1次（2時間）来客への応接のしかた

・・・（本時は1時間目）

第2次（1時間）訪問のしかた

第3次（2時間）茶、菓子等のすすめ方、

いただき方

資料11 (昭和39年)
学年：6年生
題材：すまいのくふう
区分：第1次 (2時間) あたたかいすまい方
 ・ ・ ・ (本時は1時間目)
 第2次 (2時間) 明るいすまい
 第3次 (7時間) 調和のあるすまい

資料10と11に関しては、頁数の制限のため、先に述べたように非常に簡略化した指導案であり、これだけでの判断は難しいが、どれにも共通する点として、導入で話し合いや調べ作業、実演を重視している。具体的には、それぞれ以下の様な点である。

資料10 (昭和38年) の6年生「衣生活くふう」では、導入で、家庭や通学での服装について、どんな衣服を着ているか、話し合いをさせ、その後、調和のとれた着方を検討させ、色や布地の組み合わせの工夫を考えたり調べたりする。

資料10 (昭和38年) の5年生「応接と訪問」では、導入で、応接と訪問についての各自の体験を話し合いさせ、その後、来客に対する日頃の応接の仕方 (* 指導案では、教師の家庭訪問の場合のロールプレイング) を実演する。

資料11 (昭和39年) の6年生「すまいのくふう」では、導入で、冬に備えて暖かく過ごす方法の問題点を見つけて調べさせ、その後、冬の暮らしで日光を利用することの大切さ、日光を取り入れるための工夫、室内の保温についての工夫、などの話し合いをさせている。

最後に参考として、当時の西条小学校の教諭で、後に教頭を務めた宮川忠孝氏に、当時の授業について聞き取りを行った⁹⁾。なお、宮川氏には、当時のご自身の学習指導案も見えていた。

「昭和30年代も、戦前、戦後の子供たちが自らの力でまとめる、西条教育、独創教育の伝統はあったと思います。特に社会科はそうでした。今でいうところの総合学習と形態がよく似ています。改めて昔の自分の学習指導案を見て

想い出すことは、知識を教え込むのではなく、子供の発表を中心にした授業をやっていたなあ、ということですね。家庭科については、最初の頃は教科自体についての意識が、教員全体に低かったし、温度差もかなりあったと思いますね。熱心な指導が行われるようになったのは、昭和30年代に入ってからだと思います」

宮川氏が回想した、当時の子供の自主性を重視した授業の様子については、当時の西条小学校教頭で、後に校長を務めた増田秀明氏への聞き取り¹⁰⁾からも、以下の様な同様の指摘があった。

「当時も、戦前からの西条教育の伝統はあったと思います。多くの教科で、子どもの自主性を尊重する授業実践が取り組まれていました。そして、その中心はやはり社会科でした。他の教科が、ダメとかいうのではなく、単純に、社会科が中心となって、現在の総合学習的な授業が展開され、発展してきたからだと思います。家庭科については、当初は教員間でも、戦前とどう違うのか、ということ話をした記憶があります。また、当時は女性が担当する教科だといふこともあり、その指導については、他の教科とは違う意識が働いていたのは事実だと思います。これが変化していったのは、昭和30年代末頃からだと思います」

4. まとめ

以上、西条小学校の家庭科学習指導の教育実践の様子を概略的に検討してきた。その結果、主に以下の二点が指摘できる。

まず第一に、戦後初期から昭和20年代末までの西条小学校における家庭科学習指導の特徴は、社会科を中心とした同校の独創的な指導と比べると、貧弱なものであったが、徐々に重視される教科として、特に技能指導に力を入れられるようになった。

第二に、昭和30年代における家庭科学習指導の内容は、家庭科の独自性と学習内容の構造化

をより明確化し、具体的な指導がなされるようになった。

今後の課題としては、本稿では全体像の概略的なまとめに終始したので、次の作業として、時期や対象を焦点化して、更に詳細な検討を行いたい。

【註】

- 1) 例えば、平田(1978,1980,1986)。
- 2) 西条小学校の創立40周年記念誌によると、オペラ「白壁の街」は酒都として栄え、長い歴史をもつ郷土「西条」の伝統産業である酒造りを題材に、教材化し、創作され、昭和56年当時の教職員により創作され、発表されたものであるとのことである。当時の理念を引き継ぎ、オペラ「白壁の街」は現在も、児童・教職員、保護者・地域住民・地元酒造関係者の支援、協力により上演されている。
- 3) 例えば、野上(1979,1986)。
- 4) 例えば、佐藤・森(2004)や山口(1985)らの研究もあるが、全体としては少ないといえる。
- 5) 西条町誌編纂室 1971,517-518頁。
- 6) 西条小学校、平成16年度学校要覧より。
- 7) 平田 1978,162-163頁。
- 8) 7つの小学校は、西条・吉土実・御藺宇・下見・郷田・坂城東・三永である。
- 9) 平成16年12月21日、相手宅で聞き取り。
- 10) 平成16年12月23日、相手宅で聞き取り。

【主要参考文献・資料】

岩垂芳男・福田公子編 1990、『教職科学講座 24 家政教育学』福村出版。

扇田博元 1983、『独創教育への改革-真の実力とはなにか-』第一書房。

奥田真丈監修 1985、『教科教育百年史』建帛社。

唐澤富太郎編 1984,「18教科教育の指導者(11) 家政教育」『図説 教育人物事典-日本教育 史のなかの教育者群像-中巻』ぎょうせい 965-997頁。

西条町七小学校 1959,『西条町教育の実際』。

西条町誌編纂室 1971,『西条町誌』。

佐藤園・森清加 2004,「『坂出附小プラン』(1948~55)にみられる家庭科の構想:香川県における初期家庭科教育実践史研究(IV)」『日本教科教育学会誌』第26巻 第4号 日本教科教育学会 49-58頁。

蒼空会編 1984,『道程-昭和十四年広島県師範学校本科第一部入学生の記録-』。

田部井恵美子・池崎喜美恵・内野紀子・青木幸子 2002,『家庭科教育』学文社。

常見育男 1972,『家庭科教育史 増補版』光生館。

野上完治 1979,「西条小学校(東広島市)における社会科教育実践の研究-独創教育の理論と実践-」『教育学研究紀要』第24巻 中国四国教育学会編 260-261頁。

—— 1986,「西条小学校(広島県東広島市)の実践-社会機能を軸とする教科的コア・カリキュラム-」初期社会科実践史研究会編『初期社会科実践史研究』(株教育出版センター 85-100頁)。

原田一 1964,「家庭科教育の理念-その発達史的考察-」『家庭科教育学会誌』第5号 家庭科教育学会 12-16頁。

—— 1967,「戦後における家庭科教育の諸思想とその批判」『日本家庭科教育学会誌』第8号 日本家庭科教育学会 5-9頁。

東広島市立西条小学校 1999,『東広島市立西条小学校創立40周年記念誌』。

平田嘉三 1978,「初期社会科教育の展開-西条小学校(東広島市)における社会科作業単位について-」社会認識教育研究会編『社会認識教育の探求』第一学習社 162-180頁。

—— 1980,「初期社会科教育の展開-西条小学校における転換期の学力構造-」広島史学研究会編『史学研究五十周年 記念論叢日本編』福武書店 629-653頁。

—— 1986,「西条小学校(広島県東広島市)の実践-学力構造の転換-」初期社会科実践史研究会編『初期社会科実践史研究』(株教育出版センター 266-280頁)。

福原美江 1990,『家庭科の理論と授業研究』光生館。

プレスネット 2004,「2004年(平成16年)8月7日号 東広島市制30周年記念特集① 東広島郷土史研究会会長・広島県郷土史研究協議会会長 宮川忠孝さん」。

朴木佳緒留 2000,『課題と展望』家庭科教育史研究の課題と展望』『日本教育史研究』第一九号 日本教育史研究会 57-70頁。

山口寛子 1972,「戦後の家庭科教育に関する理論遺産の検討」『日本家庭科教育学会誌』第13号 日本家庭科教育学会 9-13頁。

山口弘子 1985,「戦後における岐阜県小学校の家庭科教育について(第1報)-小学校学習指導要領にみる家庭科の変遷と岐阜県小学校家庭科教育の歩み-」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』第12号 101-120頁。

《付記》

資料の引用に際しては、旧字体の一部は新字体に改め、句読点や濁点を付した。また明らかな誤植、間違いと判断できるものは訂正した。本研究に関しては、学校所蔵資料の閲覧・コピー等で西条小学校の先生方にお世話になった。また、同校元教諭・教頭・校長を歴任された増田秀明先生、宮川忠孝先生には聞き取り調査等で特にお世話になった。記して謝意を表したい。

なお本稿は、日本家政学会大会第60回大会（2008年）での発表「西条小学校（広島県東広島市）における家庭科学習指導の研究—戦後から昭和30年代にかけての教育実践を中心に—」を大幅に修正・加筆し、新たに論文として執筆したものである。